

# 小松市内遺跡発掘調査報告書 XVIII

加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査概要報告書



2023. 2

石川県小松市埋蔵文化財センター



## 例 言

1. 本書は、石川県小松市において小松市教育委員会（平成 28 年度より小松市）が実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 今調査は、加賀国府・国分寺関連遺跡の範囲・内容等を確認することを目的とした確認調査である。
3. 確認調査・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
4. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

### 【立明寺窯跡】

- 〔調査地〕 石川県小松市立明寺町  
 〔調査面積〕 対象面積 1,661㎡の一部  
 〔調査期間〕 2016.12.16 ～ 2017.3.17（測量）、2017.10.19 ～ 2018.3.30、2020.3.9 ～ 2020.3.24  
 2021.6.7 ～ 2021.12.20  
 〔調査担当〕 横幕 真

### 【南野台遺跡】

- 〔調査地〕 石川県小松市古府町  
 〔調査面積〕 ①対象面積 2,142㎡（耕作地）の一部、②対象面積 11,000㎡（石部神社境内）の一部  
 〔調査期間〕 ① 2015.7.7 ～ 2015.8.12  
 ② 2018.2.26 ～ 2018.3.27（測量）、2018.10.9 ～ 2019.3.25、2019.11.28 ～ 2020.3.3  
 2020.4.16 ～ 2021.3.29、2021.7.26 ～ 2022.3.11、2022.6.1 ～ 2022.7.8  
 〔調査担当〕 ①川畑謙二 ②宮田 明・村上昂之

5. 本書の執筆と編集は横幕と村上が分担して行った。
6. 調査にあたり、以下の機関及び個人の協力・助言を受けた。（敬称略）  
 立明寺町内会 古府町内会 石部神社 文化庁 石川県埋蔵文化財センター 伊藤 雅文 大橋 泰夫 川畑 謙  
 久保 智康 小嶋 芳孝 菅原 雄一 知田 真衣子 出越 茂和 浜崎 悟司 向井 裕知 安中 哲徳 山内 花緒
7. 確認調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

## 目 次

I	調査のあゆみ	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	3
III	加賀国府・国分寺関連遺跡の確認調査	5
	（1）立明寺窯跡 （2）南野台遺跡	





## I 調査のあゆみ

### (1) 加賀国府・国分寺推定地の位置

弘仁14年(823)、加賀国は越前国から加賀郡と江沼郡を削いで、全国で最後に立国する。そして『和名類聚抄』の「国府在能美郡」の一節から、加賀国府所在地は能美郡国府村とされてきた。郡域は現在の能美市～小松市北部域にあたり、国府村は明治8年に古瀆村と合併して現在は小松市古府町となっている。また加賀国分寺は『続日本後紀』によれば、承和8年(841)の条に「以加賀国勝興寺為国分寺」の記載があり、定額寺の勝興寺を加賀国分寺に転用したことが想定された。この国分寺所在地については、昭和29～32年(1954～1957)頃に発掘調査と所在地を巡る論争が活発化し、現小松市中海町地内や加賀市域に求める声も上がったが、最終的には国府推定地付近の十九堂山遺跡に設置されたという説が有力となった。その根拠は、転用国分寺の存在を示す平安期と白鳳期の新旧2時期の瓦が同一遺跡で出土した点にあった。その後の継続した調査が期待されたが、耕地整理により大きく削平を受け、決め手となる建物跡等は発見されていない。

近年、国府・国分寺推定地周辺での発掘調査成果は蓄積されているが、立国前後(9世紀前半)の特筆すべき隆盛は確認できていない。一方、『和名類聚抄』のより古い写本である大東急記念文庫本には、加賀国府所在を能美郡としながら、加賀郡の注記にも「国府」と記されているため、加賀郡域の金沢市近郊から能美郡への国府移転説が唱えられている(永井1996、出



十九堂山遺跡 現況 (町内墓地)



加賀国分寺をめぐる新聞記事

- 上：昭和29年(1954)7月17日付 北國新聞
- 中：昭和31年(1956)12月8日付 北陸中日新聞
- 下：昭和32年(1957)11月17日付 朝日新聞

越 2001)。移転の真偽は定かではないが、加賀国守藤原為房が著した『為房卿記』における加賀国  
下向や、源平の戦乱を描いた『源平盛衰記』にみられる国府の位置関係から、遅くとも 10 世紀頃  
には能美郡に国府が所在したことは概ね支持されているようである。

これらの動向をふまえ、令和 5 年（2023）に加賀立国 1200 年の節目を迎えるにあたり、国府・  
国分寺所在地確認と実態解明を目的として、文化庁補助金を活用した関連遺跡の確認調査事業に着手  
することとなった。

## （2）立明寺窯跡の調査

調査の 1 つは、加賀立国前の白鳳期に操業  
された瓦陶兼業窯である立明寺窯跡の窯体探  
索調査である。平成 16・17 年度（2004・  
2005）の調査で灰原が発見され、出土した  
瓦の胎土や平瓦の格子叩き等の特徴が、加賀  
国分寺推定地の十九堂山遺跡から出土した白  
鳳期瓦と類似し、国分寺転用前に存在した寺  
院の存在を裏付ける瓦供給元として注目され  
てきた。平成 28 年度（2016）の詳細地形測  
量を経て、平成 29 年度（2017）から確認調  
査を開始した。



立明寺窯跡 遠景

## （3）南野台遺跡の調査

もう 1 つの調査地は、古代の「加賀国総社」  
遺称地、石部神社境内を含む南野台遺跡であ  
る。この神社が鎮座する高台は通称「ファン  
ヤマ」と呼ばれ、総社の異称である「府南社」  
に該当すると古くから推測されてきた。境内  
にある手水鉢横には、中央に躰穴を穿つ建物  
礎石と考えられる石が据えられており、付  
近から運び込まれたと推察される。



石部神社

平成 27 年度（2015）、神社東側の耕作地  
でトレンチ調査を実施した結果、柱穴等の遺  
構が検出されたものの、遺物は 2 次堆積とみ  
られる細片が多く、高台の大半に削平が及ん  
でいる可能性が高いことが明らかとなった。  
その後、原地形が残る神社境内に調査地を移  
し、平成 29 年度（2017）の詳細地形測量の  
のち、平成 30 年度（2018）から確認調査を  
開始した。



平成 27 年度（2015）確認調査風景



## II 遺跡の立地と歴史的環境

### (1) 遺跡の立地

加賀国府・国分寺推定地は、能美丘陵（東部丘陵）から平野部に舌状に突き出る古府台地上に位置する。この台地は、市内を流れる一級河川の梯川を、現海岸線から約8km内陸に遡った地点にある。

梯川河口は古代北陸道の駅家が置かれた「安宅駅」、あるいは近世に北海道と大阪を結ぶ北前船寄港地として水運の拠点となった「安宅湊」が栄えた交通の要衝であった。台地はちょうど梯川本流と支流の鍋谷川との合流地点付近となり、2本の河道が台地を囲むように流れている。河口や台地上から山地を眺めると、ランドマークとしての白山がそびえ立つ。またこの台地は、肥沃な穀倉地帯である平野部との比高差が10～15mある安定した土地で、周辺の古代集落遺跡から見ると、最も手前に見える高台である点も特徴である。台地の背後に連なる丘陵地には、伝統的な在地豪族の存在をうかがわせる古墳群や、須恵器・瓦生産が営まれた立明寺窯跡を含む「能美窯跡群」が展開する。

以上のように、陸路・水路を利用した交通の便の良さ、周辺よりも標高の高い安定した土地、在地豪族の歴史的脈絡が捉えられる古墳群やものづくり拠点の存在は、加賀国府・国分寺推定地としての立地条件を満たしていると言える。



梯川河口から見た白山眺望

### (2) 歴史的環境

古府台地周辺の梯川流域には、重要な古代遺跡が密集する（4頁上図）。複数営まれた集落遺跡の中でも、特に佐々木遺跡で発見された8世紀における区画をもつ整然とした建物群は、加賀立国前の隆盛を物語る「館」構造を有する。所属時期にやや時期幅はあるが、「野身郷」や「財部寺」の墨書土器から、郷統治に関わる公的施設や、在地氏族「財部氏」の居館等が考えられる。周辺には仏教関連の施設も存在し、平野部には国分寺の根本経典を記した木簡が出土した高堂遺跡、山側には八里向山B遺跡や里川E遺跡、浄水寺跡等の山林寺院がある。また台地周辺には、往時の姿がうかがえる「タチ」や「ミヤケノ」等の小字名が確認できる（4頁下図）。さらに平安時代末～鎌倉時代に成立した鶴川涌泉寺や隆明寺等の白山中宮八院の遺称地が点在する。遺称地の位置が国府推定地からの白山登拝ルート沿いと目される地点にあることは示唆的で、加賀国府と白山信仰の深い関わりにも着目される。



左：「野身郷」墨書（8世紀前半）

右：「財部寺」墨書（9世紀前半）

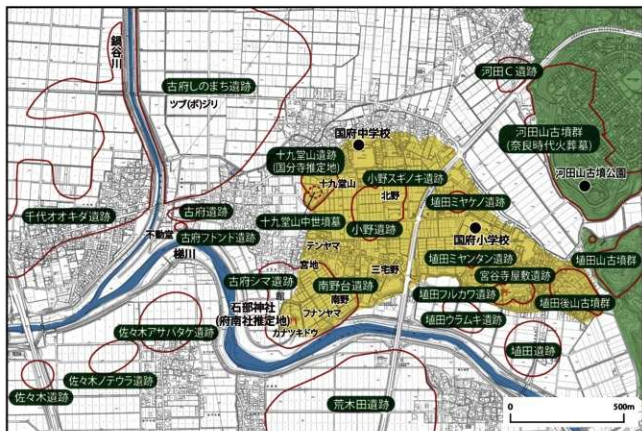
以上、I章及びII章はおもに（望月・三浦2020）を参照して記載した。

#### 参考文献

- 出越茂和 2001 『幻の加賀国府を遡る―記録に残らなかった国府の移転―』『北國文庫』第10号 北國新聞社  
 永井 肇 1996 『加賀国府の移転に関する一試案―財氏の活動―』『日本古代の国家と祭儀』雄山閣出版株式会社  
 望月精司・三浦純夫 2020 『第六章 律令と地方支配―古代村落と生産遺跡の展開―』『新修小松市史』資料編17 考古小松市



上空から見た古府台地周辺写真



加賀国推定地周辺の遺跡分布と小字名



### Ⅲ 加賀国府・国分寺関連遺跡の確認調査

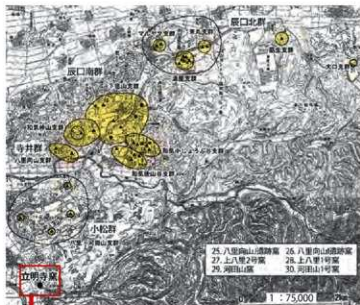
#### (1) 立明寺窯跡

##### 調査の概要

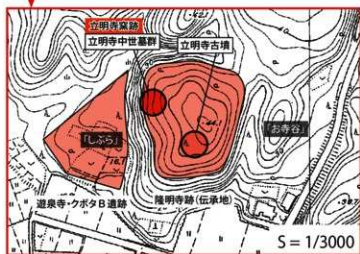
立明寺窯跡は、小松市北東部～能美市北東部の丘陵部に広がる能美窯跡群を構成する一支群で、その最も南側に位置する。前述した平成16・17年度に灰原を確認した調査は、当初は白山中宮八院「隆明寺跡」を探索するものであったが、結果的に白鳳期（7世紀末～古代Ⅱ2期）の灰原のほか、古墳や中世墓群が発見され、複合的な遺跡の展開が明らかとなった（小松市教委2010）。

その後、加賀国分寺の前身と目される寺院の瓦供給元として調査を進めるにあたり、灰原の上に形成された中世墓群を破壊しないよう窯体探索を行うため、測量成果や過去に掘削したトレンチ位置等を元に慎重にトレンチ位置を決定した。

平成29年度は、区域内で最も明瞭な陥没痕に焦点を絞り、平成16・17年度のC7トレンチを北側に拡張させた結果、窯体1基（以下1号窯）の天井崩落土と両側壁を確認した。さらに令和元年度にかけ、1号窯窯体の床面までの一部掘り下げと、規模



能美窯跡群の支群分布（望月・三浦2020より）



立明寺窯跡の位置

これまでの調査のながれ

#### 平成16・17年度 白山中宮八院の1つ「隆明寺跡」探索調査

寺院は見えなかったが、新たに①立明寺古墳：古墳時代中期（5世紀）、②立明寺窯跡の灰原：白鳳時代（7世紀末）、③立明寺中世墓群：室町時代？（14～15世紀？）を確認した。



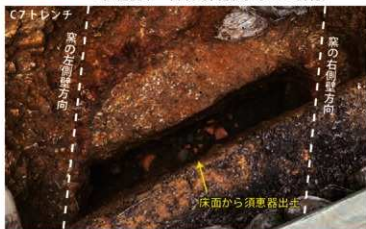
窯跡の灰原：斜面下に捨てた灰の中の灰や失敗品の堆積斜面の上方に窯本体があるという手ごかり



中世墓群：窯跡の灰原が堆積した後につくられた石を組み合わせた武士の時代の墓

# 1号窯

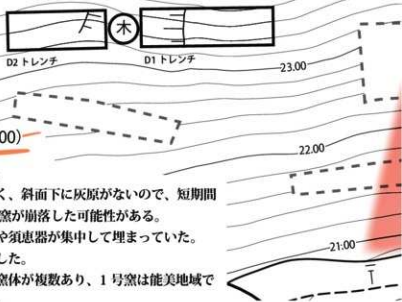
瓦生産前の須恵器窯（能美地域最古段階）  
6世紀後半＝古墳時代後期（TK43併行）



1号窯床面出土の須恵器（生焼け品が多い）

# 3号窯

2号窯と同時期かやや新しい須恵器窯  
7世紀末＝白鳳時代



## 調査の成果 (概略図 S=1/100)

- 1～3号窯が斜面に並ぶ様子が見えてきた。
- 1号窯床に残る須恵器製品は生焼け品が多く、斜面下に灰原がないので、短期間の操業で、最後は製品を焼いている途中に窯が崩落した可能性がある。
- 2号窯は焚口付近を発見し、白鳳時代の瓦や須恵器が集中して埋まっていた。
- 3号窯は天井の崩落土や窯壁の一部を確認した。
- 3つの窯のかたちや大きさは未確定だが、窯体が複数あり、1号窯は能美地域で最古段階の窯であることが明らかになった。



## 2号窯 瓦と須恵器を焼いた窯 7世紀末=白鳳時代

D4トレンチ





立明寺1号窯（左：窯体推定ライン、右：窯側壁検出状況〔C7トレンチ〕）



立明寺2・3号窯（左：窯体推定ライン、右上：2号窯俯瞰〔D4トレンチ〕、右下：3号窯俯瞰〔D5トレンチ〕）

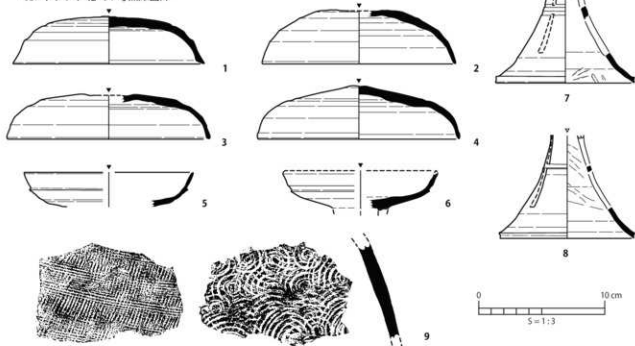
確認のための掘削（C8・C12・C13・D1・D2トレンチ）を行った結果、床面出土土器から所属時期は古墳時代後期（6世紀後半＝TK43併行期）に遡ることが判明し、規模に関して排煙部側はC13トレンチに及ばず、焚口側は少なくともC8トレンチ付近までは延びることが予測された。令和3年度は本来の目的であった白鳳期の窯体探索のため、D3・D4・D5トレンチを新たに掘削し、D4トレンチからは窯の焚口～前底部と推測される被熱部や天井崩落礫、瓦・須恵器の集中、D5トレンチからは窯壁や天井崩落礫、炭混じりの土層をそれぞれ確認した。D4・D5トレンチともに床面までの掘削は行っていないが、D4トレンチの窯体（以下2号窯）は瓦・須恵器集中から白鳳時代（7世紀末＝古代Ⅱ1新～Ⅱ2古）、D5トレンチの窯体（以下3号窯）は2号窯と同時期かやや新しい時期と推測される。2号窯の瓦・須恵器集中は、隣接する3号窯から廃棄された可能性もあるが、斜面下に広がる灰原の状況によれば、瓦の出土は南側の2号窯側に偏る傾向にあるため、各トレンチの遺物出土状況は各窯の焼成実態を反映したものと考えられる。いずれの窯体も現況から1.0～1.5m程掘り下げた位置で検出しており、断面の観察状況から斜面全体が大規模に崩落したことがうかがわれる。

#### 出土須恵器について

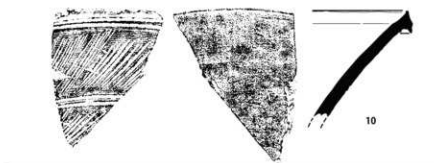
9頁に出土須恵器の一部を掲載した。1～9は古墳時代後期の1号窯床面出土である。1～4は口径15～16cmのナデ調整の坏H蓋で、1はやや器壁厚く口縁端部に段をもつものに対し、2～4はやや薄く口縁端部を丸く仕上げる。5・6は高坏の坏部、7・8は高坏の脚部で、脚部は長方形透かし孔が2段3方につくもので、当期の特徴を示すものである。9は裏胴部片である。これら床面出土土器はいずれも褐色～橙色混じりの酸化焼成色を呈しており、十分な焼成がなされなかったことを示

1号窯関連

〈C7トレンチ北（1号窯床面）〉



〈斜面下断面〉



2・3号窯関連

〈D4トレンチ南（2号窯前底部）〉



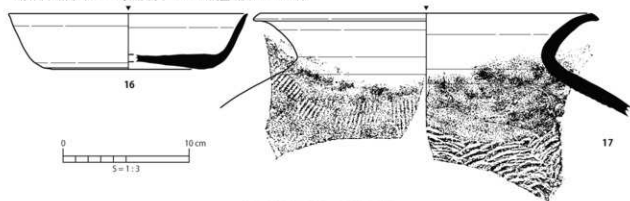
〈D5トレンチ（3号窯埋土）〉



〈C12トレンチ（土器集中とその付近）〉

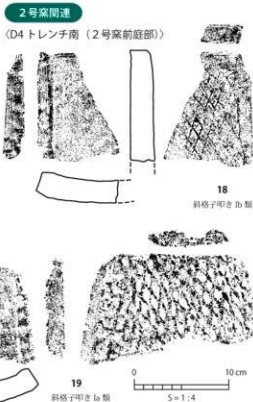


〈斜面下断面（2・3号窯灰原、H16-17調査断面Oライン）〉



立明寺窯跡出土須恵器実測図

している。また1号窯斜面下には灰原は形成されず、床面遺物同様の焼き色を呈する10の裏口縁部片がわずかに確認できる程度で、他は2・3号窯由来と考えられる。よって1号窯は、焼成に失敗して生産体制が確立することなく崩落した可能性が高いと言える。11～17は2・3号窯に由来する須恵器である。11は2号窯前庭部埋土から出土した口径11.5cmの埴Gで、底部手持ちヘラケズリを施す。図示できていないが内面にヘラ記号「×」を付す。12は3号窯埋土出土の無台坏身（坏Aか坏G）の底部。13～17は灰原出土で古代Ⅱ2期を主体とする。13は口径14cmの返りのある坏蓋、14は口径16.8cmの有台の坏B身、15・16は坏A身で16は口径19cmの特大量、17は口径26.1cmの中腹の口縁部片である。



立明寺窯跡出土瓦実測図



立明寺窯跡出土瓦の特徴 (H16・17 出土資料)

## 出土瓦について

10頁右上図18・19は今調査で2号窯前庭部埋土から出土した平瓦である。両者ともに桶巻き作りで斜格子の叩き目を有する白鳳期の所産であるが、18は格子枠が浅く幅狭な1b類で焼きが良く、19は格子枠が深く幅広な1a類で焼きが甘いといった違いがある。過去の調査で出土した瓦の中でも平瓦は最も多く、10頁下図に示したように、斜格子叩き（Ⅰ類）のほか、正格子叩き（あるいは斜格子叩きの後に正格子叩き）のもの（Ⅱ類）や、叩き目をナデ消すもの（Ⅲ類）がある。これらに行基式の丸瓦や「目」字スタンプ文をもつ軒平瓦が伴う。

既に報告されているとおり、当窯で生産された瓦は、国分寺推定地の十九堂山遺跡出土の瓦と胎土や叩き目、焼成度合が類似しており、十九堂山に白鳳期寺院が存在した可能性は高いと言えよう。また十九堂山から流出したと考えられる千代オオキダ遺跡出土瓦についても、細部の違いや軒丸瓦の有無はあるものの、同一支群内のバリエーションと捉えれば、当窯供給品の可能性が高い。



十九堂山遺跡出土瓦（右上が白鳳期、他は平安期）



平瓦 - 桶巻作り 格子叩き 軒丸瓦 - 鹿井八重道華文 軒平瓦 - 「目」字スタンプ

千代オオキダ遺跡出土瓦（白鳳期）



古代の窯体復元図



○ 平安期瓦出土遺跡 ○ 白鳳期瓦出土遺跡

梯川流域の古代瓦出土遺跡位置





礎石の確認状況（平成30年度）



礎石の確認状況（令和2年度）



平坦面の端部（西側）



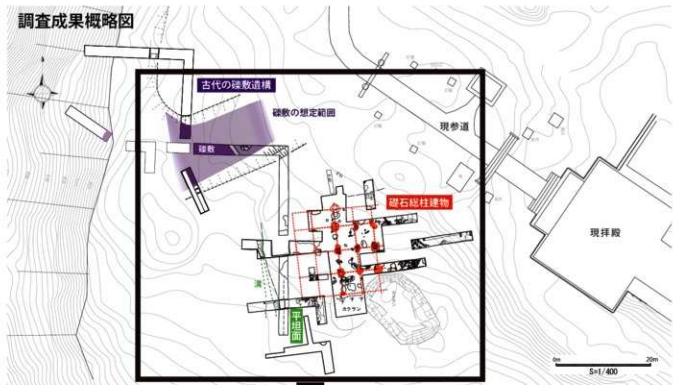
平坦面の端部（北側）

### 中世の礎石総柱建物

平成30年度、調査区中央の土器片集中付近において、土師器の細片や礫が含まれた整地層下に、上面が平坦に整形された石材が確認された。令和2年度の調査では、その東側に約2m間隔で並ぶ2石の石材が確認され、その軸に直交する形でおおよそ2.4m間隔の礎石痕ないしは抜き取り痕が並び、礎石総柱建物が存在することが明らかになった。建物は、磁北で南北および東西方向に軸が揃っており、現段階では4間×4間以上の規模をもつと想定される。時期については、整地層下面の土器片等から室町時代（16世紀以前）と想定され、周辺には多くの礎石の痕跡が確認できることから、同じ場所でも複数回にわたり建て直しが行なわれ、その最後の姿であると考えられる。また礎石が据えられた地山面はおおよそ平坦に整えられており、建物の北側と西側は段状に整形されていることが確認された。これらについては建物に伴う造成の痕跡と思われ、段切りからは建物範囲の限界を判断できる。合わせて西側の段下に段に沿うような形で溝が一部確認されており、区画溝または雨落ち溝等の可能性をもつ。

令和3、4年度の調査では、これまでに確認されている礎石の東側及び、南側の延長線上に新たな礎石の痕跡が確認され、建物規模の拡大や別の建造物が併存することもあり得ることが明らかになった。特に調査区東側は、近世以降の盛り土上に社殿が存在していることが確認されており、この盛り土の下に建物が続いていることも想定される。

調査成果概略図



拡大図



## 中世の礎石総柱建物



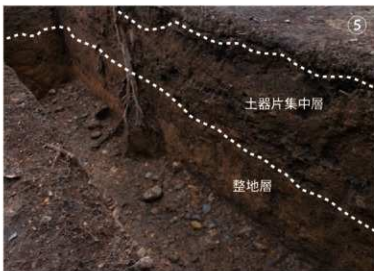
礎石総柱建物全景(北西から)

- ・平坦に整地した地山面に構築(大部分の礎石は抜き取りもしくは移動)
- ・建物規模は推定南北4間×東西4間以上で、時期は16世紀以前
- ・礎石の抜き取り痕等から複数回の建て直しが行われていると想定される



礎石検出状況(西から)

## 古代の礫敷遺構



整地層及び礫敷遺構(中央トレンチ北面)

- ・地山を溝状に掘り込み、その底面に敷設
- ・確認部分から溝の上端幅で約8m、礫敷幅約5～6m程度と想定
- ・時期は平安時代後期(11世紀後半～12世紀前半)
- ・礫敷遺構と土器片集中層に時期差はほぼなく、人為的な造成を行っている



平坦面端部(西から)



礫敷遺構(北から)



礫敷遺構(西から)

## 古代の礫敷遺構

礎石総柱建物に加え、令和2年度にはもう一つ大きな成果が得られた。調査区北西側では平成30年度の調査時に、平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半頃）の土器片集中層が確認されていたが、令和2年度には、その下層から遺物の含有がほとんどない厚さ約1mの黄褐色粘質土・褐色土が確認された。さらにその下層より数センチから10cm程度の礫、須恵器片や土師器片を敷き詰めた礫敷遺構が検出された。

礫は平坦な円礫が中心で、他より運び込んで使用していると考えられる。礫敷に含まれる須恵器には9世紀後半頃のものなども含まれるが、礫敷直上から上層の土器片集中層と同様の時期の土師器が出土しており、礫敷遺構の廃絶から整地までが一体で行われている可能性がある。

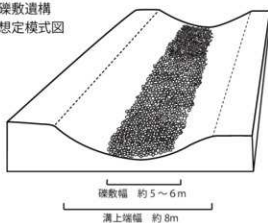
令和3年度の調査では、礫敷は北東から南西に向けて溝状に続く地山を掘りくぼめた底面部分に礫の敷設が確認された。溝の上端幅で約8m、礫敷の幅で約5～6mになると想定される。

また礫敷遺構の性格については未だ明らかにできてはならず、祭祀空間や上面の整地に伴う地業など、様々な可能性がある。ただ地山を人為的に掘り込み、道状に丁寧に敷設されていることから、現時点では参道の可能性が高いと考えられる。



礫敷遺構 中央トレンチ壁面図（トレンチ南面／断面は Agisoft Metashape で作成）

礫敷遺構  
想定模式図



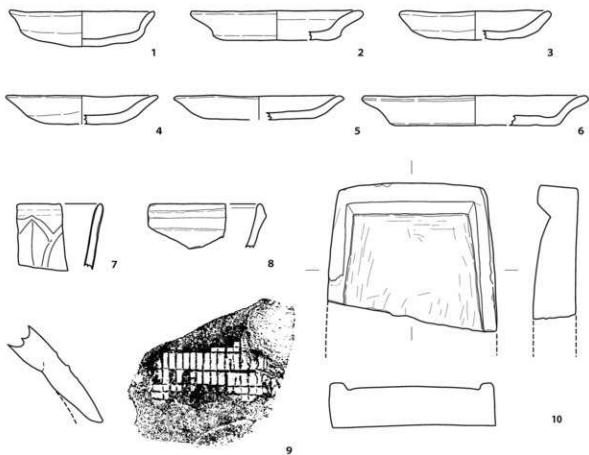
礫敷遺構 復元イメージ



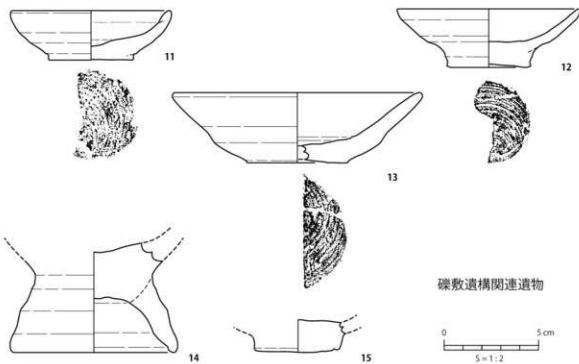
礫敷遺構 中央トレンチ（南から）



礫敷遺構 中央トレンチ（西から）



礎石総柱建物関連遺物



礎石構造関連遺物

南野台遺跡出土遺物実測図

### 南野台遺跡出土遺物について

出土遺物については礎石総柱関係と礎敷遺構にそれぞれ関連する遺物の一部について実測図または写真を掲載した。

#### 礎石総柱建物関連の遺物

1～6は中世土師器(カワラケ)である。非ロクロ整形で、口径7.6cm～11.7cm、器高は1.25～1.85cmを測る。1～3は底部の立ち上がりから口縁への外反が認められる。7は青磁の碗の口縁で、外面に蓮弁文がめぐる。8は白磁の碗の口縁である。9は加賀焼の甕の肩で、格子目の押印が刻印されている。10は石硯で、硯海には擦り痕が残る。いずれも整地層中から出土したもので、時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。調査で確認された遺物のほとんどは細かく打ち砕かれた土師器であり、他にも建物に使用したと考えられる鏡等も出土している。

#### 礎敷遺構関係遺物

11～15はいずれもロクロ整形土師器である。口径は8.4cm～13cmで器高は2.65cm～高台部分が残存する14では残存高5.8cmを測る。底部の回転糸切痕が明瞭な3点については拓本を掲載している。出土した遺物は、埋め立て土の上層に当たる土器片集中層で、15は礎敷遺構の直上出土である。これまでの調査で確認されている出土遺物のほとんどは、土器片集中層からの出土で礎石総柱建物の整地層出土遺物と同様に破片は細かく打ち砕かれている。遺物の時期は平安時代後期と考えられる。この他、特徴的な遺物として古墳時代後期の管玉がある。これは礎敷遺構の中央トレンチから北西側のトレンチで平安時代の土師器を伴う層(整地層)から出土しており、一点のみの出土ではあるが、周辺から鉄片なども確認されている。周辺に古墳の存在は確認されていないが、平安時代の造成で削平された古墳の主体部遺物であった可能性がある。



南野台遺跡出土遺物写真

## 府南社と総社

総社は国や郡、郷などの神社を一家所に集めて勧請したもので、主に国ごとに設けられたものが指されることが多い。その創始は11世紀後半頃とされ、長寛元年（1163年）頃成立の『白山之記』によれば、国司が月初めに国中の神社を参拝する煩雑さを省くため、総社を置いたとされる。加賀国総社は府南社の名前が挙げられ、今回、総社推定地で発見された2つの遺構は、文献上の姿に結びつく成果と考えられる。

## 為房卿記と礎敷遺構の時代

礎敷遺構の時期である平安時代後期には、寛治5年（1091年）に国司として下向する藤原為房の行程を記した『為房卿記』に府南社の記述が登場する。そこでは国司為房が僅かな滞在期間の中で府南社を3度も参拝していることが記されており、国司にとって総社が重要視されていた様子をうかがうことができる。国司庇護のもとで府南社もまた隆盛を誇っていたと考えられ、礎敷遺構が完成によって埋め戻され、大規模な整地をおこなっている様子は、この頃、総社整備のため大規模な整備をおこなったことを表しているのかもしれない。

## 礎石総柱建物

礎石総柱建物付近の整地層には、中世初め頃からの遺物が含まれており、多数の礎石の痕跡は、このような時期から同じ場所で長期にわたり建て直しが行われている可能性を示している。中世においても南禅寺関係の書状に度々名前が登場するなど、その存在は健在であり、今回発見された礎石総柱建物は、このような中世府南社に関連する建物の一部である可能性が高いと考えられる。

## 寛治五年（一〇九一）為房卿記

（六月下旬に加賀国に下向）

七月一日

昨日、大雨が降り、民衆は大変喜んだ。府南社で毎月一日の朔幣（幣帛へいはく）の儀式を行うとともに、願いが叶った祈雨読経を終えた。そして国衛侍を派遣して十人の僧に特別布施を与えた。

七月八日

白山御齋会（こさいえ）僧尼に食を供した法事

七月十日

本日より府南社で佛京の祈願として大般若経。

七月十三日

本日より白山宮で年穀豊稔を祈願する最勝講。

七月十五日

府南社の神輿を国分寺に遷し、国分齋会を行う。また、この日から国内九社に奉幣して上洛や検田の間のことを申し上げさせる（十七日まで）。

七月十七日

夕方、（巡検・参拝のために）船に乗る。

七月十八日

明け方、館に帰る。明日は凶日なので印鑰（いんにやく）国印を納めた櫃の鍵を蔵にしまう。

七月十九日

明け方、船に乗り出発。午後二時ごろ淡津到着。執務指示、宿泊。

七月二十日

暁に出発。曇ごろ、越前大丹生到着。すぐ出船。夜に敦賀着、官舎泊。



立明寺窯跡：須恵器窯体3基の存在を確認、内1基は白鳳期の瓦陶兼業窯



南野台遺跡：神社境内地で平安時代末期の礎敷遺構と中世の礎石総柱建物跡を確認

## 小松市内遺跡発掘調査報告書ⅩⅧ

加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査概要報告書

- 発行日 令和5年2月3日
- 編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター  
石川県小松市原町ト77-8 TEL (0761) 47-5713
- 印刷 株式会社ゲンダ美術印刷  
石川県小松市丸の内町2-32 TEL (0761) 22-7031

